

夏目漱石

処女作追懷談



処女作追懷談



わたくしの処女作——といえはまず『猫』ねこだろうが、別に追懐するほどのこともないようだ。ただ偶然ああいものができたので、わたくしはそういう時機に達していたというまでである。

というのが、もともとわたくしには何をしなければならぬということがなかった。もちろん生きているから何かしなければならぬ。する以上は、自己の存在を確実にし、ここに個人があるということを他にも知らせねばな

らぬくらいの上見は、常人と同じように持っていたかもしれぬ。けれども創作の方面で自己を發揮しようとは、創作をやるまえまでも別段考えていなかった。

話が自分の経歴みたようなものになるが、ちようどわたくしが大学を出てからまもなくのこと、ある日外山正一氏からちよつと来いと言ってきたので、行ってみると、教師をやってみてはどうかということである。わたくしは別にやってみたいともやってみたくないとも思っていないが、そう言われてみると、またやってみる気がないでもない。それでとにかくやってみようと思つてそ

ういうと、外山さんはわたくしを嘉納さんかのうのところへや  
った。嘉納さんは高等師範の校長である。そこへ行つて  
まず話を聞いてみると、嘉納さんは非常に高いことをい  
う。教育の事業はどうとか、教育者はどうなければなら  
ないとか、とてもわれわれにはやれそうにもない。今な  
ら話を三分の一に聞いて仕事も三分の一ぐらいで済まし  
ておくが、その時分はバカ正直だったので、そうはいか  
なかつた。そこで、とてもわたくしにはできませんと断  
わると、嘉納さんがうまいことをいう。あなたの辞退す  
るのを見えますます依頼したくなつたから、とにかくや

れるだけやってくれとのことであつた。そう言われてみると、わたくしの性質としてまた断わりきれず、とうとう高等師範に勤めることになつた。それがわたくしのライフのスタートであつた。

ここでちよつと話が大もどりをするが、わたくしも十五、六歳のころは、漢書や小説などを読んで文学というものをおもしろく感じ、自分もやってみようという気がしたので、それをなくなつた兄に話してみると、兄は文学は職業にやならない、アツコンプリツシメントにすぎないものだといつて、むしろわたくしをしかつた。しか



しよく考えてみるに、自分はなにか趣味を持った職業に従事してみたい。それと同時に、その仕事がなにか世間に必要なものでなければならぬ。なぜというのに、困ったことには、自分はどうも変物である。当時変物の意義はよく知らなかった。しかし、変物をもつてみずから任じていたとみえて、とてもいちいちこちらから世の中度を合わせていくことはできない。なにかおのれを曲げずして趣味を持った、世の中に欠くべからざる仕事がありそうなものだ。——と、その時分わたくしの目に映つたのは、今も駿河台するがだいに病院を持っている佐々木博士の養

父だとかいう、佐々木東洋という人だ。あの人はだれもよく知っている変人だが、世間はあの人を必要としてい  
る。しかもあの人はおのれを曲ぐることなくして立派に  
やっ歩いていく。それから井上達也いのうえたつやという眼科の医者がやは  
り駿河台にいたが、その人もちようど東洋さんのような  
変人で、しかも世間から必要とせられていた。そこで、  
わたくしは自分もどうかあんなふうになつてやっ  
いきたいものと思つたのである。ところがわたくしは医  
者はきらいだ。どうか医者でなくて何かいい仕事があり  
そうなものと考えて日を送っているうちに、ふと建築の

ことに思いあたった。建築ならば衣食住の一つで世の中になくてかなわぬのみか、同時にりっぱな美術である。趣味があるとともに必要なものである。で、わたくしはいよいよそれにしようと思った。

ところがちようどその時分（高等学校）の同級生に、よねやまやすさむらう米山保三郎という友人がいた。それこそ真性変物で、常に宇宙がどうの、人生がどうのと、大きなことばかり言っている。ある日この男がたずねてきて、例のごとくいろいろ哲学者の名まえを聞かされたあげくの果てに、きみは何になると尋ねるから、実はこうこうだと話すと、

彼は一も二もなくそれをしりぞけてしまった。その時かれは日本でどんなに腕をふるったって、セント・ポールの大寺院のような建築を天下後世に残すことはできないじゃないかとかなんとか言って、盛んなる大議論を吐いた。そして、それよりもまだ文学のほうが生命があると言った。元来、自分の考えはこの男の説よりもずっと实际的である。食べるといふことを基点として出立した考えである。ところが米山の説を聞いてみると、なんだか空々漠々くうくうぼくぼくとはしているが、大きいことは大きいにちがない。衣食問題などはまるで眼中に置いていない。自

分はこれに敬服した。そう言われてみるとなるほどまた  
そうでもあると、その晩即席に自説を撤回して、また文  
学者になることに一決した。ずいぶんのんきなものであ  
る。

しかし、漢文科や国文科のほうはやりたくない。そこ  
で、いよいよ英文科を志望学科と決めた。

しかし、その時分の志望は実に茫漠ぼうぼくきわまつたもので、  
ただ英語英文に通達して、外国語でえらい文学上の述作  
をやつて、西洋人を驚かせようという希望をいだいてい  
た。ところがいよいよ大学へはいつて三年を過ごしてい

るうちに、だんだんその希望があやしくなってきた、卒業したときには、これでも学士かと思うようなバカがで  
き上がった。それでも点数がよかったので、人は存外信  
用してくれた。自分も世間へ対しては多少得意であった。  
ただ自分が自分に対すると、はなはだきのどくであった。  
そのうちぐずぐずしているうちに、このおのれ往に対する  
きのどくが凝結し始めて、体のいいレシグネーション生と  
なった。わるく言えば立ち腐れを甘んずるようになった。  
そのくせ世間へ対してははなはだ気炎が高い。なんの高  
山の林公、などと思っていた。

そのうち、洋行しないかということだったので、自分  
なんぞよりももつとどうかした人があるだろうから、そ  
んな人をやったらよかろうと言うと、まあそんなに言わ  
なくても行ってみたらいいだろうとのことだったので、  
そんなら行ってみてもよいと思っで行った。しかし、留  
学中にだんだん文学がいやになった。西洋の詩などのあ  
るものを読むと、まったく感じない。それをむりにうれ  
しがるのは、何だかありもしない羽をはやして飛んでる  
人のような、金がないのにあるような顔して歩いている  
人のような気がしてならなかった。ところへ、池田菊苗<sup>いけだきくえ</sup>

君がドイツから来て、自分の下宿へ泊まった。池田君は理学者だけれども、話してみると偉い哲学者であつたに驚いた。だいぶ議論をやつてだいぶやられたことを今に記憶している。ロンドンで池田君に会つたのは、自分にはたいへんな利益であつた。おかげで幽霊のような文学をやめて、もつと組織だつたどっしりした研究をやろうと思ひ始めた。それからその方針で少しやつて、全部の計画は日本でやり上げるつもりで西洋から歸つてくると、大学に教えてはどうかということだつたので、そんならそうしようと言つて大学に出ることになつた。(こ



れも今いった自分の研究にはならないから、最初は断つたのである)

さて正岡子規君とはもとのからの友人であつたので、わたくしがロンドンにいるとき、正岡に下宿で閉口した模様を手紙にかいて送ると、正岡はそれを『ホトトギス』に載せた。『ホトトギス』とはもとのから関係があつたが、それが近因で、わたくしが日本に帰つたとき（正岡はもう死んでいた）編集者の虚子から何か書いてくれないかと頼まれたので、はじめて『吾輩は猫である』わがはいといふのを書いた。ところが虚子がそれを読んで、これはいけま

せんという。訳を聞いてみると、だんだんある。今はまるで忘れてしまったが、とにかくもつともだと思って書き直した。

今度は虚子が大いにほめてそれを『ホトトギス』に載せたが、実はそれ一回きりのつもりだったのだ。ところが虚子が、おもしろいから続きを書けというので、だんだん書いているうちに、あんなに長くなってしまった。というような訳だから、わたくしはただ偶然そんなものを書いたというだけで、別に当時の文壇に対してどうこうという考えもなになかった。ただ書きたいから書き、

作りたいたから作ったままで、つまり言えば、わたくしがああいう時機に達していたのである。もつとも、書きはじめたときと、終わる時分とは、よほど考えがちがっていた。文体なども人をまねるのがいやだったから、あんなふうにやってみたにすぎない。

なにしろ、そんなふうで今日までやって来たのだが、以上を総合して考えると、わたくしはなにごとに対しても積極的でないから、考えて自分でも驚いた。文科にはいったのも友人の勧めだし、教師になったのも人がそう言ってくれたからだし、洋行したのも、帰ってきて大学

に勤めたのも、『朝日新聞』にはいったのも、小説を書いたのも、皆そうだ。だからわたくしという者は、一方からいえば、ひとが造ってくれたようなものである。

(明治四一年九月一五日 『文章世界』)





日本文学電子図書館

---

「夏目漱石全集 第3巻」

著 者：夏目漱石

制作者：宮澤一郎

出版社：春陽堂書店

1965年8月31日 初版

---

日本文学電子図書館